

---

# 異人

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異人

### 【Nコード】

N6016D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

異人が街を徘徊し子供を襲うという。果たしてそれは本当なのか。そして異人のその力はどうなのか。都市伝説を小説のテーマにしました。

## 第一章

異人

「あのさ」

小学校の帰り道。草尾雄吾はクラスメイトの女の子木村美香に不意に声をかけてきた。雄吾は背の高い大人びた子供で美香は背の低い茶色の長い髪の子だ。二人並んで歩いているとどちらも同じ六年生にはちよつと見えなかった。

「最近出るらしいね」

「出るって何が？」

「お化けがだよ」

雄吾はそう美香に告げた。

「ああ、あれ!？」

美香は雄吾の言葉を理解したのかその可愛らしい顔を急に曇らせていく。

「聞いてるわ。何か凄く大きな人が夕方に出るのよね」

「そう、それで小さい子供をさらっていくんだ」

雄吾も強張った顔で話す。本当に存在していると信じて疑っていない顔であった。

「それでそのさらった子供だけねど」

「どうなるの？」

「北朝鮮に連れて行かれるって噂だね」

「嘘、それって凄く怖いわよ」

子供達の間でもこの国のことは知られているようだ。さながら特撮の悪役のような扱いであるが外れではないのが実に恐ろしい話である。

「そんな人がいるなんて。警察は何やってるのよ」

「それが手が出せないらしいんだ」

ここからがそうした話の凄いところである。

「何でもその手に何でも切る鎌を持っていてね」  
「うん」

「百メートルを一秒で走って車を持ち上げたりするらしいんだ。だからとても手が出せないんだって」

「そうなの」

「そうさ。だから子供達も絶対に逃げられないんだって」  
そういう話になっている。実際のところそれが本当かどうかはわからない。

「それで北朝鮮に連れて行かれるらしいんだ」

「それでそのお化けってどういう格好しているの？」

「凄く背が高くてね」

夕伍はとりあえず聞いた噂を元に話す。

「髪が金色で目が青くて」

「外国の人？」

「そうらしいんだ。鼻が高くてとても怖い顔をしていて  
こうした存在が怖くない顔をしていない筈がない。

「口がとても大きいらしいんだ。名前は異人さん」

「外国の人って意味ね」

「昔に日本に来た外国の人の幽霊らしいんだ」

経歴まであった。

「日本に連れて来た子供が病気で死んでおかしくなってね。それで  
お化けにまでなったそうなんだ」

「その人が私達をさらうのね」

「だからさ、美香ちゃん」

ここで雄吾は真剣な顔になる。

「一人になったら駄目だよ、絶対にね」

「ええ、わかったわ」

二人はそんな話をしながら家に帰る。既にこの異人さんの話は学校の先生達の間でも問題になっていた。子供達が怖がっているので皆気にしていたのだ。

「こうした話は何時でもあるな」

校長先生は教頭先生を前にして校長室で困った顔をしていた。絨毯の上にある校長の席も今は随分と座り心地が悪く感じられた。

「口裂け女とか人面犬とか。またか」

「しかし校長、今回も本当にいるようです」

教頭先生はあえて本当にいると言った。

「どうやら」

「そうか。今度もか」

校長先生もそれを受けて本当にいると応えた。

「困ったな、実際にいるとなると」

「はい、子供達に被害が出ます」

「どちらにしてもあれだよ」

校長先生は困った顔のまま述べた。

「子供達が怖がっている。何とかできないか」

「一応警察の方から集団登下校を勧められています」

「それだな、後は親御さんの協力か」

「はい。塾や習い物の往き帰りには付き添いで」

「うむ。まずはそう対策をして」

口避け女の時のことを思い出していた。その時の対策を踏襲していた。

「それで行くか」

「しかし、話が大きくなっています」

教頭先生はまた言う。

「一人だったのが三人になったりしていますし」

「最近では鎌ではなく巨大な斧を持っているそうだな」

「それで子供達を真っ二つにするそうです」

話がさらうのから殺すといったものにもなっていた。何故か尾ひれがついてきているのだ。

「真っ二つか」

「それを聞いて子供達もさらに脅えて」

「困った話だ、全く」

校長先生はそれを聞いてまた苦い顔になった。

「噂を消すことなぞできんしな。どうしたものか」

「その異人に弱点はあるのでしょうか」

教頭先生はふとそれを言ってきた。

「どうなのでしょうか、そこは」

「さてな」

校長先生は少し首を捻ってからまた答えた。

## 第二章

「ない筈はないだろう、絶対に何かある」

「それが何かですが」

「口裂け女はポマードだったな」

校長先生はまた口避け女を出してきた。この謎の妖怪の弱点はポマードでポマードと叫べば逃げると言われていたのだ。ついでに言えばベッコウ飴が好物だったという。

「そうでしたね、確か」

「では今風でムースか何かか？」

思いつきだがこう言う校長先生だった。

「それなら」

「どうでしょうか。それはわかりませんが」

教頭先生もわかりかねていた。

「そうなるかもですね」

「とにかくだ。弱点は絶対にある」

校長先生は断言する。

「妖怪ならな。それがわかれば違うな」

「そうですね。本当に」

二人は学校から帰る前にそんな話をしていた。それが何処からか街に流れた。すると急に異人の弱点が出来た。雄吾はまた学校の帰り道に美香に話をするのだった。

「ムースが嫌いなんだって」

「ムースってあの整髪料の？」

「うん、そうらしいよ」

そう美香に話す。

「何でもね、異人はクリームが好きらしいんだ」

「クリームが好きなの」

「それでムースとクリームを間違えて食べてから。それが大嫌いに

なったらしいんだ」

「何か間拔けな話ね」

美香はそう答えて雄吾の話に首を傾げさせた。

「それってとても」

「僕もそう思うけれどムースが嫌いなのは本当だよ」

それでも美香にこう言う。

「だからさ。一つどう？」

「くれるの？」

「だって。若しかしたら一人の時に異人に襲われるかも知れないじゃない」

真剣な顔で美香に対して言う。

「だからだよ、はい」

「有り難う」

美香は少し考えた後で雄吾の差し出したそのムースを受け取った。

「じゃあ何かあった時にね。使わせてもらうわ」

「絶対に使わないと駄目だよ」

雄吾はそこを念押ししてきた。

「さもないと。そのまま殺されるからね」

「斧で真っ二つよね」

「隣町の子がそれで殺されたらしいよ」

噂話がまた出る。こういった話では伝聞が伝聞を呼ぶ。そうして犠牲者が絶対に出るのである。

「頭から真っ二つにされてね。道に転がっていたらしいんだ」

「真っ二つに!？」

「うん、真っ二つ」

そう美香に言う。

「だからさ、美香ちゃんも気をつけてね」

「え、ええ」

怯える声で雄吾に対して答える。それと共に今手に持っているムースが非常に頼もしく思えるのだった。



「わかったわ。それじゃあ」

「夕暮れ時に出るからね」

まだ日は高い。それで二人はまだ安心していた。

「その時になったらね」

「家の中には入って来ないわよね」

美香はふとそれを心配した。

「家の中に入って来られたら」

「家の中までは追って来ないそうだよ」

雄吾はそう答えた。

「何でも。出るのは街中だけで」

「家の中までは追って来ないのね」

「うん。それで家の中まで入れば助かるってさ」

また一つ妙な話が出る。しかしそれが何故かまでは話されないのだった。

「とにかくさ。何かあっても助かる方法はあるから」

「諦めたら駄目なのね」

「何かあったら僕もいるから」

ここで雄吾は急に美香を守ると言い出した。

「いいね、怖がることはないよ」

「うん」

二人はそんな話をしながら家に帰る。そうしてそれから毎日一緒に登下校をするのだった。

### 第三章

こうしたことがあちこちで起こっていた。校長先生と教頭先生はムースが子供達の間に出入っていると聞いてそれについても話をするのだった。

「最近では親がわざわざ買って持たせているそうです」

「そうらしいな」

校長先生は教頭先生の話聞いていた。夕暮れ時の赤くなってきた校長室の中で話をしている。

「それでムースがかなりの売れ行きだとか」

「はい、児童達も皆持っていますので」

「異人が怖くてだな」

「そうです。持っていない子供が殺されるという話も出ていますし」

「尋常じゃないな、それは」

校長先生はその話を聞いて顔を顰めさせた。半ば本当のことに考えるようになっていた。

「殺されたのか」

「そういう話です」

教頭先生も三割程本当の話だと思っている。

「本当かどうかわかりませんが」

「ううむ」

教頭先生の話をここまで聞いて難しい顔を作ってきた。

「だとすれば一大事だが」

「警察も対策に乗り出しています」

「警察もか」

「はい、目撃談も相次いでいまして」

何故かそうなってきていた。

「それで。各都道府県で捜査班も作られているようです」

「そこまで話が大きくなっているのか」

あらためて驚く校長先生であった。

「これは。えらいことだな」

「そうですね。どうなるのかわかりません」  
教頭先生も危惧する顔を見せてきた。

「このままどうなるやら」

「それで異人はこの街には出ているのか？」

「出ているそうです」

校長先生にとっては最も聞きたくない言葉がよりによって返って来た。

「既に数人それで」

「殺されているのか」

「幸い我が校の児童ではないですが」  
それを聞いてまずは安心した。何故か身近にはそうした存在は出ない。

「ですが我が校も一層の対策を」

「わかっている」

校長先生は迷うことなく教頭先生のその言葉に頷いた。

「それでは明日の会議でな」

「はい、重点的に話し合いましよう」

警察も学校も本気で異人への対策に乗り出していた。雑誌にも特集が組まれる。子供達だけではなく。しかしここで話は意外な方向に向かうのであった。

「えっ、死んだの！？」

「そうらしいよ」

また下校中に雄吾が美香に話していた。二人の手にはムースがある。今では皆が皆異人を恐れて持って歩いているようになっていく。

「北朝鮮の將軍様に肅清されたらしいんだ」

「肅清されたってどうして」

「ほら、僕達がムース持ってるじゃない」

「ええ」

自分の持っているものも見て答える。

「このせいで子供を捕まえられなくなってね。それで仕事が果たせなくなってる」

「それでなのね」

「そうらしいよ。まだ生きているって噂もあるけれど」

「生きているって」

「逃げたって噂もあるんだ」

あくまで噂である。

「それで夜な夜な街を彷徨い歩いているって話もあるけれど」

「本当はどうかかわからないのね」

「うん、けれど死んだって話があるのは本当だよ」

そこは強調する雄吾であった。無意識のうちに。

「北朝鮮に連れて行かれて將軍様に縛り首にされたんだって」

「本当だったらしいけれど」

「そうだよ。そんなのがいたら何時までも夕方に遊べないから」

「塾に行くのだって怖いし」

子供達にとってはそうした意味で実に切実な話だったのだ。少なくとも現実に非常に影響している話ではあった。

「いなくなっていて欲しいね」

「そうよね」

雄吾の言葉に頷く。

「もう夕方外に出るのが怖くて仕方ないのよ」

「そんなに怖いのか？」

「だって。何時物陰から」

怯える目で辺りを見回して述べる。

「異人が出て来るんじゃないかって不安で仕方ないから」

「皆そう言うよね、それは」

「雄吾君もそうでしょ」

「まあね。やっぱり僕もね」

美香の言葉に応えて頷いてみせた。

「怖いんだよね。だからムースだって持つてるし」

「本当にもう出ないのかしら」

美香はそのことを必死に考えていた。考えていることは何があっても出て来て欲しくないということだけであった。他のことは考えてはいない。

## 第四章

「絶対に出て欲しくないけれど」

「皆そうだよ。けれど暫くは」

「用心しないとね」

「何しろ化け物だからね」

そのことが念頭にある。だからこそ雄吾も警戒しているのである。

「だからムースを持ってね」

「そうね。これさえあれば安心よね」

二人だけでなく皆まだ警戒していた。しかし異人の噂はこの頃から急激に消えていき何時しか話はなくなった。皆ムースを持たないようになり集団登下校もなくなった。とりあえず騒動は収まったのであった。

「終わったかな」

「そのようですね」

教頭先生は校長先生の言葉に応えている。場所はやはり校長室であつた。

「どうやらこうやら」

「異人は本当に殺されたのかな」

校長先生も異人が殺されたという噂は聞いていた。だからここでそれを出したのである。

「さて、それはわかりません」

「真相は不明か」

「そもそも異人ですらいたのかどうかわかりません」

「若しくはまだいるかさえもな」

「そうです。何もかもが謎のままなのです」

教頭先生はここではあえてこう述べるのであった。

「話が大きくなっていましたし」

「それと共に姿を変えてもいたな」

「そうですね」

校長先生の言葉に頷く。

「自然と。誰かがそれを言えば広まったのでしょうか」

「それと共に姿が変わる」

校長先生も言う。

「不思議な話だな」

「全く以ってです。ただ」

「ただ。何だ？」

「それを考えますとやはりいたということになります」

教頭先生は目を険しくさせ考える顔で校長先生に述べてきた。

「異人はか」

「はい、私達の言葉と共に経歴や数や行動が変わっています」

それも的確にだ。誰かが三人いると言えば三人になり斧を持っていると言えば斧を持つ。ムースが嫌いと言うと本当にムースを怖れる。これは。

「つまりこれは」

「我々の心の中にいるというのだな」

「私はそう考えます」

これが教頭先生の考えであった。話している本人もまだ首を捻ってはいるがそれでもあえて言葉に出してみたのである。彼なりに思うところがあり。

「それが実際に世の中に出て来る、それが妖怪やその類なのかと」

「こうした都市伝説もか」

「全く同じです」

そうしてまた言う。

「こうした話は昔からあったでしょうし」

「そうだな。妖怪の類は全てそうだな」

校長先生も教頭先生の言葉に頷いた。

「考えていけば。そうなる」

「はい。だからこそ」

教頭先生はまた述べた。

「異人もまた存在しているのです。そしてまた出ます」

「出るか」

「私達が彼を思い出せば」

あえて彼と表現する。

「出て来ます。必ず」

「そういうことか」

「はい。口裂け女にしろ人面犬にしろ」

そうした類と同じものとされる。だがそれはあながち外れてはいなかった。少なくとも校長先生も教頭先生もそう考えだしていた。

「出て来るでしょう」

「それが妖怪なのだな」

「そうです、それが妖怪です」

教頭先生の言葉が強くなった。

「私達が考え、それが世の中に出て動く」

また言う。

「そうした存在ことが妖怪なのです。つまりそれは」

「我々の心の鏡なのだな」

「そういうことです」

これ以降異人の話は消え去った。だがそれは一時的なものなのかも知れない。何故かと言うと。誰かが異人を思い出せば異人はまた出て来るかも知れないからである。彼が妖怪であるならば。その時を待っているだけなのである。誰かが思い出すその時を。

異人 完



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6016d/>

---

異人

2010年10月8日15時04分発行